

2月にここに来た時、アメリカの有名なバプテスト教会の牧師リック・ウォーレンさんの話をして、「5つの目的が教会を動かす」という本に、有名な聖句がふたつ選ばれていて、そこから5つの目的が挙げられてきたのですが、その中の最初の聖句（マタイ22章37~40節）は、

『イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。』』でした。

ですから、人間にとって、大切なことは、先ず神様を全身全霊で愛する、ということ。それは具体的には礼拝をする、ということになる、とリックさんは説明しました。

そしてもうひとつ、隣人を自分のように愛することの大切さを、覚えておかなければなりません。

しかし、私たちが神様を愛するのは、先ず神様が私たちが愛して、イエス様を送って下さったことに根拠がある、ということをやヨハネの手紙は強調しています。

皆さんは、このキリスト教の愛の教え、愛の信仰を、誰かに説明する時、どんな話をしますか？
イエス様が話されたたとえ話の中でも、愛についてのふたつの有名なたとえ話がある、と言ったら、何を思いつきますか？

一般に言われているのは、神様の愛を語るものとして「放蕩息子の話」があり、また隣人愛について語るものとして「善いサマリア人」のたとえがあるとされています。

そして、この神様の愛の話と、隣人愛の話には、共通の大切な言葉が出てきます。

放蕩息子の話の方は、放蕩の限りをつくした息子が回心して、父親の所へ帰ってきたときの場面です。
「彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」

サマリア人の話では、サマリア人が通りかかる時の場面です。

「ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。」

「憐れに思う」という言葉が共通します。この憐れに思う、というのが、キリスト教の愛を、より深く表現している言葉なのです。そして、今日の福音書の始めのほうでも、こちらはイエス様ご自身のことなのですが、36節「また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」となっています。このことがきっかけとなって、イエス様は弟子たちを選び、その弟子たちを伝道に派遣することが今日の福音書の要約です。イエス様の伝道の根拠ですね。

それではこの、「憐れに思う」というのは、どんな意味なのでしょう？

この「憐れむ」という言葉は、「お腹」とか「はらわた」を意味する言葉です。たとえば、サマリア人の話で、道に傷ついて倒れている人の痛み、苦しみが、自分のお腹に響く、という意味です。「断腸の思い」という言葉があるでしょう。この「断腸」という言葉は、中国の「子を失い悲しみのあまり死んだ母猿の腸が、細かくちぎれていた」という故事からきており、腸がちぎれるほど悲しいこと。悲しみに堪えないこと。らしいのですが。

実際には他の人が傷ついているのに、自分の体が痛みを感じるほどの、痛みの共感ということでしょう。

イエス様の行動というのは、神様が人類の痛みを見てみぬふりができない、その思いが、イエス様という存在になり、形に表れた、ということです。そして、今日の福音書では、イエス様が働くだけでなく、同じような仕事をする弟子たちを12人選んだ、ということです。

この働きの力の源は、勿論聖霊という神様の力によるものですが、言葉を換えて言うなら、人の痛みを、自分のお腹で感じて、ほっておけないような、自分のことのように関わってゆく、ということだろうと思います。

サマリア人の話を例に挙げてみましょう。道で追いはぎに会い、半殺しの状態で傷つき倒れている人を、祭司やレビ人は通り過ぎてしまいました。しかし、外国人であるサマリア人は、その傷ついた人を見て見ぬふりができませんでした。どうしてでしょう？

このサマリア人は、大勢のユダヤ人に囲まれて、少数の差別される立場で働いていました。半殺しのよな体に傷を負っていたわけではないでしょうが、周りのユダヤ人の心無い発言や態度に遭遇し、心はしばしば傷ついていたと思います。そのような生活上の痛み、苦しみが、他人の痛みを自分のことのように感じる、鋭い感性を育てさせたのだらうと思います。

そういう意味では、私たちが日常生活で遭遇する痛み、悲しみは、私たちが人のことで「憐れに思う」「断腸の思いになる」、非常に貴重な体験をしていることなだらうと思います。

しかし、私たちの日常の経験ですぐにそんな感性が与えられるかどうか、なかなか私たちは鈍い人間なのです。

そんな私たちが、人々の痛みに関感するためには、私たちの日頃体験できないことを、疑似体験するような、小説を読んだり、映画を観たりすることが、大変役立つように私には思えます。それは別の言葉で言えば、「感動する」経験をして感性を養う、ということになるでしょう。

クリスチャンである私たちの活動が、人々の気持ちに関感できるものであること、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」（ローマ12章15節）という生き方が必要ですが、その根拠は、イエス様が、多くの群衆に同情し、「深く憐れまれた」というところにあるように思えます。